

看護における家族研究の動向

— 看護系雑誌10年間のテーマ分析より —

梶谷みゆき

Current Trends in Family Nursing : An Analysis of Journal of Nursing in Recent 10 Years

Miyuki KAJITANI

概 要

医療施設や家庭において、看護活動の対象は患者及びその家族が中心となっている。しかし、看護の現場ではともすると健康障害をきたした患者のみにとらわれがちであり、家族に関わる困難性をも感じている。看護の分野における家族研究の状況を知るため、わが国の過去10年間の看護系雑誌8誌における家族に関する文献を検索した結果、「家族」や「家族援助」をキーワードとする文献は、334件あった。特に慢性疾患や悪性疾患、在宅ケアを受けている対象を中心に家族に関する研究が行われていた。また今後、看護の領域独自の家族に関するアセスメントの視点や、理論に基づいた援助方法に関する研究が待たれていることが明らかになった。

キーワード：家族研究動向，家族援助，家族療法

I. はじめに

家族に関する研究は、我が国では1930年代に社会学において農山村地域社会の研究分野の一つとして始まった。また、心理学の分野でも、家族の心理や援助について研究する家族心理学という専門分野が1980年代に生まれている。また臨床心理学では、児童や青少年の行動問題へのカウンセリングから発展した「家族療法」も注目されている。「家族療法」とは、患者を含む家族内対人関係を変えることで患者の症状を軽減したり消去したりしようとする、家族の機能や構造に着目したアプローチである。

看護の分野では公衆衛生看護の分野を中心に、

患者のみでなく家族にも視点をおいた実践が展開されてきた。しかし、家族をとらえることは、家族の歴史や家族成員間の関係性などダイナミックでありかつ表面には出にくい要素が多いため困難を要する。また、援助の必要性に気づいていても、具体的な援助方法を見つけだせないまま機会を逸することもある。このような状況にあって、看護の分野でも家族に対する見方や援助のあり方において、より実践的なものが求められているが、理論的な基盤はまだ十分に確立されていないと考える。

今回、過去10年間の看護系雑誌に掲載された家族に関する文献の数量と内容を調査し、わが国の看護における家族研究の動向について考察

した。

II. 研究方法

1. 過去10年間(1985年~1994年)の看護系雑誌に掲載された論文のテーマから「家族」「家族援助」をキーワードとする文献を検索した。

看護系雑誌は、日本看護協会図書館における複写頻度の高い雑誌及び二次資料における採録頻度の高い雑誌などから評価された、1990年発表の看護コアジャーナル29誌¹⁾から、「看護教育」、「看護展望」、「看護研究」、「看護」、「看護実践の科学」、「看護技術」、「臨床看護」、「看護学雑誌」の8誌を選択した。

2. 見出し語及び補足語から内容を推測し、以下の2つの視点から領域ごとに分類した。

- 1) 患者の健康障害及び発達段階別による分類

看護全般および他分野

成人看護(急性期・慢性期(リハビリテーションを含む)・終末期(予後不良の難病を含む))、老人看護、母性看護、小児看護、精神看護、地域看護の領域

- 2) 家族研究の分野別による分類(鈴木らの分類²⁾を活用)

家族機能・役割、家族関係、家族の危機・適応、家族援助方法、家族療法、

家族研究(理論・方法)、その他

3. 家族研究の数量及び内容から、看護の分野において家族が注目されるようになった時期と背景を分析する。
4. 家族研究においてどのような領域が発達し、どのような領域の研究が求められているかを考察する。

III. 結果

前記した方法により整理した結果を、表1、図1、表2に示す。

表1と図1は、患者の健康障害および発達段階別に分類した結果である。

1985年から1994年の10年間に、「家族」および「家族援助」をキーワードとする文献は合計334件あった。特集が組まれたことによって年により多少ばらつきがあるが、毎年20~30件前後の文献が掲載されていた。1989年と1994年は特に多かった。

全体としては、成人のリハビリテーションを含めた慢性疾患患者とその家族、予後不良の難病(筋萎縮性側索硬化症や進行性筋ジストロフィー等)を含めた終末期にある患者とその家族、高齢者とその家族を取り扱ったものが4割近くを占めた。

具体的な内容から見ると、1980年代後半は小児の分野において、①気管支喘息や難病と闘う患児と母親をはじめとする家族の理解に関するものやその援助方法、②母性における奇形

表1 健康障害および発達段階別分類

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	計
成人(急性期)	1	1	2	2	3	0	2	2	5	1	19(6%)
成人(慢性期)	4	4	3	7	2	4	1	4	2	11	42(13%)
成人(終末期)	4	3	0	9	10	4	7	5	1	2	45(13%)
老人	4	2	5	3	5	2	3	3	8	7	42(13%)
母性	0	0	0	4	3	0	0	0	0	2	9(3%)
小児	2	4	2	2	7	5	3	4	2	4	35(10%)
精神	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	4(1%)
地域	2	3	2	3	2	0	5	2	2	2	23(7%)
看護全般・他分野	6	20	5	10	21	3	5	11	7	27	115(34%)
計	23	37	19	40	54	19	26	31	28	57	334

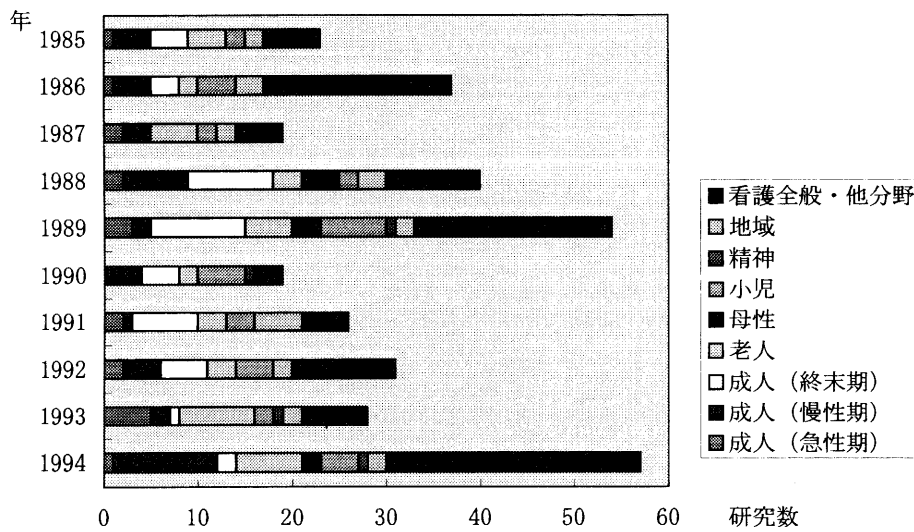


図1 健康障害・発達段階別家族研究の推移

表2 家族研究の分野別分類

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	計
家族機能・役割	0	1	0	1	4	0	1	1	1	1	10(3%)
家族関係	1	6	0	6	2	0	1	2	0	2	20(6%)
家族の危機・適応	0	3	1	4	3	2	2	3	3	2	23(7%)
家族の力量(対処能力)	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3	6(2%)
家族支援システム	0	0	1	0	0	0	3	0	0	5	9(3%)
家族援助方法	15	11	9	15	22	12	14	15	15	20	148(44%)
家族療法	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	4(1%)
家族研究(理論)	0	4	5	0	7	0	0	2	2	15	35(10%)
その他	7	12	3	14	12	4	4	8	7	8	79(24%)
計	23	37	19	40	54	19	26	31	28	57	334

児や未熟児を出産した母親と児および家族の理解や援助方法に関するもの、③成人を対象とした分野では子宮や乳房切断などに関わるボディイメージの障害や自己の役割に関わっての家族との関係調整等の内容があった。1990年代への移行期から1990年代前半にかけては、上記に加え慢性閉塞性肺疾患や心疾患などの慢性疾患と日常生活の支援における家族との関わり、脳卒中後のリハビリテーションと家族援助、終末期の患者と家族の支援に関わるもの等がテーマとして取り上げられている。また、痴呆性老人と家族を取り扱った老人看護学の分野や、在宅ケアにおける介護の問題など地域看護学の分野での研究が、わずかではあるが増加してきている。

看護全般あるいは他分野の項目の具体的な内容としては、「家族」の定義や概念およびその歴史の変遷や、社会学、心理学などの分野における知見の紹介等があった。

また最近では、急性期の領域においても家族をとりあげているものが増加しつつある。ICU(intensive care unit)やCCU(coronary care unit)に緊急あるいは重篤な状態で収容された患者および家族の危機状況に対してどのような対応をすべきかが、研究の焦点となっている。

表2は、家族研究の分野別による分類の結果である。家族援助方法の研究は、10年間を通して多く、かつ各年ごとにおいても研究数はコン

スタントである。

次に多いのが、家族研究（理論）、家族危機・適応に関する研究であり、これらは年をおって増えてきている傾向にある。一方、家族機能・役割、家族関係、家族の力量（対処能力の査定）、家族支援システム、家族療法等の研究は少数である。「その他」項目の中には、家族の思い、患者の疼痛に対する家族の考え方、家族と医療従事者とのトラブルなども含まれている。ことに、家族の思いに関しては、その他の中の約3割であった。

看護系雑誌8誌の中で、看護教育や看護管理を主テーマとする雑誌において、家族研究の掲載数は少なかった。

IV. 考 察

以上の結果をもとに、2つのことについて述べる。

1. 看護の分野において「家族」が注目されはじめた背景

まずはじめに看護の分野で「家族」が注目されはじめた背景について述べる。

近年核家族化や少子化などの家族形態や家族機能の縮小化が指摘されている³⁾。一方医療の分野では、患者のみならず家族をも危機に陥れる悪性疾患、生涯疾病との共存を余儀なくされる慢性疾患などの増加、また人口の高齢化に伴う要介護者の増加など、人々の健康に関わって家族機能の充実や多様性が求められるという、現在の家族における社会状況とは相反する状況がある。このような矛盾の中心に位置するのが家族であり、打開の鍵を握るのも家族であるといえる。医療場面において、家族に接近し適切な対応を促すことができる専門職の1つとして、看護職があると考えられる。

看護の分野において家族研究が増加傾向にあるのは、この相反する状況の中で医療施設や地域で働く看護職の困惑と、状況改善を模索する結果であると考えられる。しかしながら前述の結果において、看護教育や看護管理を主テーマとする雑誌の中では家族についての研究はわずかで

あった。看護基礎教育や医療施設の看護管理部門において、家族に関わる教育や看護職が家族を支援できるシステムは十分ではないと推測できる。

また医療の現場では、従来の医療従事者の判断を重視してきたあり方を改善し、利用者の側に向けたよりよい医療を求めて、「説明と同意」「患者の自己決定」「セルフケア」などの考え方が浸透してきている。それらを効果的に実践する上でも家族は重要な役割をもつ。看護者やその他の医療従事者の価値観ではなく、患者自身あるいはその家族が考え納得した状態で、健康の回復や維持の方法を見つけ出せるための援助方法についても看護者が十分な知識と技術を獲得していないことが、家族研究を押し進める原動力になっていると考える。

2. 看護の分野における家族研究の課題

次にもう1点、家族研究として具体的には何が求められているかということについてである。

従来看護者は、家族を患者を取り囲む環境の一つとして、あるいは患者の健康回復・維持の手段の一つとして位置づけてきた。家族研究の分野別分類では家族への援助方法が最も多かったが、その中でも生活指導や介護指導と関連した内容が多かったのは、その現れではないかと思う。家族成員を個として、しかも静的に捉えるのではなく、患者も含めた家族成員同士が相互に作用し動的に関わっていることを再度認識することが求められている。表2の中で「患者の心理」や「家族の心理」にかかわるものが「思い」の段階にとどまっておき、家族関係や家族援助方法の項目に分類できなかつたことは、家族の役割・機能や家族の関係性の分析、それに基づいたや家族援助方法において、看護職が課題にすべき点であると考えられる。改善方法の一つとして、家族内対人関係を変化させることで患者のみならず家族の健康や安寧をはかる「家族療法理論」を学習する意義は大きいと考える。しかし、鈴木らは、家族療法を必要とする前の段階で予防的な関わりをしていくことも看護者にとって重要であるとも述べている⁴⁾。

さらに入院時にとる患者背景録において、家族に関する情報として単に家族構成を聴くのみ留まっており、かつ家族の範囲も結婚や血縁や同居を意識していることが多いのではないだろうか。家族の役割・機能や関係性を重視するならば、家族成員間の心理的な距離や患者に認識されている家族の像を推し測ることが求められる。看護が取り扱う家族は、結婚、血縁、同居など、社会的な規範による家族の単位にとられることのない見方が必要だとも言われている⁹⁾。

家族に関する文献が特異的に多かった1989年は、国際連合において政治・経済などの側面から家族危機が問題として取り上げられた年である。1994年は、1989年の国際連合の総会決議により「国際家族年」と定められた年であり、わが国の社会情勢に加え世界的にも家族が注目されたことが関係していると思われる。

わが国の看護の分野では、1993年から現在までの3年間に、患者のみでなく家族を含めた看護という基盤に立った「家族看護学」あるいは「家族看護モデル」に関する書籍が3冊出版されている。その中で用いられている看護理論は、ニード看護論の中のオレム (Orem) 理論、システム看護理論のロイ (Roy) 適応理論やロジャーズ (Rogers) 理論である。さらに、心理学の「家族療法理論」や家族社会学を中心とする「社会理論」を活用している。また、より限定され実践的な中範囲理論として、「家族ストレス理論」「家族役割理論」「家族コミュニケーション理論」なども活用している。しかし、家族生活における人間関係や力動を完全には説明できていないのが現状である⁹⁾。現在、わが国の家族研究はひとつひとつの事例を掘り起こし分析することにより、看護の分野における家族の概念や理論を確立しようとしている段階であると考えられる。

看護職が、患者と家族に効果的に看護を提供することができるようになるためには、家族を分析する視点と実践的な援助方法において多くの課題をもっているといえる。

V. む す び

看護系雑誌8誌に掲載された文献をもとに、看護の分野における家族研究の動向をみてきた。看護者が家族に注目しはじめた背景には、人々の健康や幸福を維持し向上させたいと願う社会の大きな要請があった。しかし、その要請に即座に対応できるための家族を分析する能力や援助していく能力は、看護職に課せられた学習課題である。今回の文献検索では、小児看護、母性看護、精神看護、地域看護各領域の専門誌の検索が不十分であり、家族研究における看護全体の把握という点において限界がある。家族に関する他分野の動向もふまえて、看護が家族にどのように関わられるかを考えていきたい。

引 用 文 献

- 1) 伊藤敬子：看護文献の活用と検索の実際，インターナショナル ナーシング レビュー，16(2)，62-63，1993.
- 2) 鈴木和子他：家族看護学の発展に関する文献概観，千葉大学紀要，15，3，1993.
- 3) 森岡清美他：新しい家族社会学，培風館，185-206，1994
- 4) 鈴木和子他：家族看護学の発展に関する文献概観，千葉大学紀要，15，2，1993.
- 5) 鈴木和子：対象領域別の家族援助に共通する視点，日本看護科学学会誌，15(1)，25，1995.
- 6) Marilyn M. Friedman 著野島佐由美監訳：家族看護学—理論とアセスメント—へるす出版，61-64，1994.

参 考 文 献

- 1) 岡堂哲雄編：講座家族心理学6—家族心理学の理論と実際—，金子書房，1994.
- 2) 中村伸一：家族療法，臨床看護，20(6)，864-868，1994.